を得たるは、比量せられがたし。かゝれば時の至らず天の許さぬことは疑なし。但し、下の上を剋するは極めたる非道なり。終にはなどか皇化にまつろはざるべき。先づ誠の德政を行はれ、朝威をたて、かれを剋するばかりの道ありて、北の上の事ぞと覺え侍る。且つは世の治亂の姿をも能く鑒みしらせ給ひて、私の御心なくば、干戈を動かさるゝか、弓矢を治めらるゝか、天の命に任せ、人の望に隨はせ給ふべかりし事にや。終にしては、繼體の道も正路に歸り、御子孫の世に一統の聖運を開かれぬれば、御本意の未だ遂せぬにはあらず。されど、一旦もしづませ給ひしこそ口をしく侍れ。

『増鏡』

『増鏡』は、舊說に一條冬良の作なりと傳へたれど、確かならず。此の書、後鳥羽天皇の御時より後醍醐天皇隱岐より還幸ありし程までの事を記したれば、蓋し建武中興より程遠からぬ時代に成りしものなるべし。編述の體裁、大方『大鏡』『今鏡』等に似たり。文章も彼等に似て、優美莊麗なり。世人之と『水鏡』

『三鏡』

『大鏡』の二書とを併せて『三鏡』といふ。

『新島もり』の一節（『増鏡』）

いつの年よりも五月雨はれまなくて、富士川、天龍など、えもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬もうちわたしがたければ、攻めのぼる武者どもゝあやしくなやめり。かゝれども、遂に都に近づくよしきこゆれば君の御武者もいでたつ。其勢六萬餘騎とかや、宇治、勢多へわかちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばずまねびがたし。あるは深き山に逃げこもり、遠き世界におちくだり、すべて安げなく騷ぎみちたり。いかゞあらむと、君（後鳥羽）も御心亂れておぼしまどふ。かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いとゞ心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、賴もしげなし。

六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に味方の軍破れぬ。荒礒に高汐などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下只物にぞあたりまどふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人（泰時、時房）の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々所々におぼしまどふ事

さらなり。本院(後鳥羽)は隠岐の國にたはしますべければ、まづ鳥羽殿へ御代車のおやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。ものにもがなやと思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしたろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して御姿うつし書かせらる。七條の院へ奉らせ給はむとなり。

『太平記』

戰記文『太平記』は、花園天皇の御世より後村上天皇の御時にかけて、およそ五十年間の事蹟、即ち南北朝の分裂、諸處の戰況、忠臣烈士の物語等を記載したるものなり。其の作者は明かならず。體裁は、全く『源平盛衰記』『平家物語』に倣ひ、文章は一層華やかなり。全體の記事も、亦前二書の如く、虚實相混じたるものなり。一部を通ぜる思想は、鎌倉時代のそれの如く、佛敎的思想にして猶ほ更に顯著なり。

主上笠置を御沒落の事『太平記』

さる程に、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め進らせて、宮々、卿相、雲客、皆歩跣（カチハダシ）なる體にて、いづくを指すともなく、足に任せて落ちゆき給ふ。此人々、始め一二町が程こそ、主上を扶け進らせて、前後に御伴をも申されたりけれ。雨風烈しく道闇くして、敵の鬨の聲此處彼處に聞えければ、次第に別々になりて、後には只藤房、秀房二人より外は、主上の御手を引き進らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そこども知らず、迷ひ出させ給ひける御有樣こそあさましけれ。如何にもして夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の傍なる靑塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草の疎らなるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず、どかうして夜晝三日に、山城多賀の郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。藤房、秀房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今は如何なる目に逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、うつゝの

夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞召して、木蔭に立寄らせ給ひければ下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく　笠置の山を　出でしより　天が下には　かくれがもなし

藤房卿泪をおさへて、

いかにせん　たのむ陰とて　立ちよれば　なほ袖ぬらす　松の下露

第四節　御伽草子

鎌倉時代の初より流行せし繪卷物は、本期に入りて愈發達し、從來繪畫をのみ主とせしもの、今は文章の上にも多少留意することゝなりぬ。之を御伽草子と呼びて、當時中流以上の社會の翫びたること、殆ど中古の人の物語に於けるが如くなりき。其の作の今日に傳はれるもの『浦島太郎』『文正草子』『鉢かつぎ』等數十種あり。然れども、是等の草子は、おほ繪畫を主としたるものなれば、詞書の作者の名世に知られざるが多し、各編の材料並に趣向は、率ね古傳說又は古物語より採りて改刪したるものなり。文章も亦古物語の格法を學び、之に室町時代の特製にかゝる杜撰なる漢語及び俗語を混用せるものにて、別段の妙味なし。此の物著作の目的は、單に上流社會の慰に供する外、寓意の中に神明佛陀の靈驗を說きて、讀者の道義心を養ふにありしが如し。

『鉢かつぎ』の一節　『御伽草子』

中將殿は御覽じて、鉢かつぎはいづくへぞとの給へば、いづくともさして行くべき方もなし、母に離れて、結句かゝるかたわさへつき候へば、みる人ごとにおぢおそれ、にくがる人は候へども、あはれむ人はなしと申しければ、中將殿きこしめして、人のもとには不思議なる物のあるもよきものにて候とのたまへば、仰せに從ひて置かれける。さて、身の能は何ぞとの給ひければ、なにと申すべきやうもなし、母にかしづかれし時は、琴、琵琶、和琴、笙、篳篥、古今、萬葉、伊勢物語、法華經八卷、かずの御經どもよみしよりほかの

能もなし。さては能もなくば、湯殿にれけとありければ、いまだならはぬことなれど、時にしたがふ世のなかなれば、湯殿の火をこそたかれけれ。あけぬれば、見る人わらひなぶり、にくがる人おほけれども、なさけをかくる人はなし。あけくれ御行水よ、はちかつぎとて、三更四更もすぎざるに、五更の天もあけざるに、せめれこされていたはしや、ふしなれぬ篠竹の、おのれと雪に埋もれて、伏し倒れたる風情して、ものはかなげにおきなほる。思ひをしばの夕けぶり、たつ名をも苦しと打ちながめ、行水は沸きまいらせ候、はやとり給へと催促する。くるれば、御足の湯沸かせや、はちかつぎと下知をする。うき身ながらもおきあがり、みだれたる柴をひきよせながら、かくぞつらね給ひける。

苦しきは　をりたく柴の　夕けぶり　うき身と供に　たちや消えまし

と、かやうにうちながめ、いかなる因果のむくひにや、かゝるうき世にすみそめて、いつまで命ながらへ、かほどにものを思ひねの、むかしを思ひいでのさと、胸はするがの富士のだけ、袖は淸見が關なれや。いつまで命ながらへて、うきには堪えぬ涙河、流れて末もたのまれず、菊の裏葉にれく露の何

となりゆく此身ぞと、ひとりくどきてかくばかり、

松風の　そらふきはらふ　よにいでゝ　さやけき月を　いつかながめん

かやうに詠じ、足の湯をぞわかしける。

室町時代の小説

御伽草子の外、また此の時代の小説に、一條兼良の『鴉鷺合戰物語』、作者未詳の『魚類合戰物語』、『常磐嫗物語』、『鳥部山物語』、『松帆浦物語』等ありき。是等は、只、中古の物語を模倣せるに過ぎずして、文章も趣向も甚だ陳腐なるものなり。

第六編　江戸時代の文學

第一章　總論

江戸時代の範圍

江戸文學の種類

江戸文學發達の源因

江戸時代の文學とは、慶長八年徳川家康征夷大將軍となりし頃より、慶應三年徳川慶喜公將軍職を奉還して、王政復古の時に至る、二百六十餘年間の文學を云ふ。

本期の文學の種類は饒多なること、前古無比にして、其の作者は社會の各級に亘り、其の性質は概ね通俗の嗜好に適せり。かくの如く、文學の豐富隆盛を來たしゝ源泉は、徳川氏の開祖家康が意を學問の振興に注ぎしに在り。殊に、儒學は國家の經營に最も關係あるものとして、大いに奬勵せられしかば、鎌倉時代より室町時代と次第に衰へ來たりし漢學は、勃然として復興の機を得、碩學大家頻りに出でゝ、或は治國の要を說き、或は修德の道を講じ、或は訓詁を專らとし、或は詩文を究め、遂に學派の分立・競爭を見るに至りぬ。然るに又、開府の初より等閑に附せられざりし國學は、漢學の隆興に對して盛に反動の勢を現し、古歌古文の研究に從ふ者、神道、國史の發明を事とする者、其の他制度考證、語學等の專門家、前後陸續としてあらはれ、皆古風の恢復を計りたり。かくの如く、漢學と國學とは、兩々相持して拮抗せし間に、各、幾多の純文學を生產したるのみならず、文學の趣味を漸く社會一般に普及せしめたり。然れども、其の最も普通人の嗜好に投ぜしは、漢學・國學兩者の陶冶を受けたる和漢混和文、及び俳句淨瑠理・小說の類なりき。此の中、俳句以下は既に前時代に於いて其の芽を發せしが、本期に至り、文運の興起につれて大成したるものなり。

江戸文學隆盛の時期

是等各種の文學は、大むね本期を通じて殆ど絶えず繁茂せしが、彼此一齊に美花を着けしは、元祿前後及び寛政前後の二回とす。さて明和安永の頃より、洋學の研究、其の端緒を開きたりしが、未だ我が文學に著き影響を與ふるに至らざりき。

洋學の研究

思想

本期の文學を一貫する思想は、主として儒教主義にして、小說淨瑠理の如きも、大抵勸善懲惡を主とする傾向あり。佛教に依れるものと雖も、また因果應報の旨に添へて、此の意を表せるが如し。但し、國學の興隆するにつれて、日本主義また行はれぬ。

言語と文章と

言語は、初め室町時代の紛亂せるまゝを踏襲せり。其の後國學者力めて語格の匡正を謀りしが、是れ單に記載語の上にありしかば畢竟口語と文章との間に著き懸隔を存するに至れり。國學者の雅文漢學者の和漢混和文の如き、共に平俗の談話とは甚だ遠きものたり。但し、此の間に立ちて、最も能く和漢雅俗の言語を調和したるを、小說淨瑠理の文とす。實に、是等の文章中には詞想共に江戸時代文學の精髓ともいふべきものあり。

第二章　歌謠

第一節　總說

歌界の概況

室町時代に、連歌より一轉したる俳諧並に俳句は、本期に入りて空前絶後の偉觀を呈し、又彼の時代の特殊文學たりし謠曲及び狂言は、更に歩を進めて淨瑠璃及び演劇脚本の新裝を著けたり。和歌には、萬葉派及び桂園派と唱ふるもの續

歌謠の類別

出して、陳腐に屬せし歌界に一大革新を與へ、殆ど奈良平安の盛時に接する趣あり。又、久しく廢れたりし長歌さへ、本期に入りて勃興し、別に狂歌、狂句といふもの、亦盛に行はれたり。

俳諧俳句及び淨瑠璃の最も盛なりしは、元祿の頃にして、萬葉派の和歌の榮えたるは其れより稍後なり。而して、脚本と狂歌とは寶曆以後寛政の間に、桂園派の和歌は文化文政の交に於いて、孰れも隆盛を極めつ。今、是等を和歌俳句及び淨瑠璃の三大部に分ちて叙述し、和歌の下に狂歌を、俳句の下に狂句を、淨瑠璃の下に脚本を附說せむとす。

第一節　和歌　附狂歌

和歌の復興

和歌は、本期の最初に在りては、單に室町時代の餘風を承けて些少の進步もなかりき。其の頃細川幽齋(藤孝)木下長嘯子(勝俊)といふは、其の身共に武人にして歌學に通曉せるものなりしが、殊に長嘯子は野に下りて、ひたすら斯道を翫びしかば、從來上流社會の專有なりし和歌をして、一般平民の物たらしむる媒介を爲せり。さる程に、下河邊長流僧契沖等相續いで出で、堂上の歌人が妄りに規則に拘泥して、在野の歌人を容れざるを慨き、『萬葉』『古今』等の古歌を研究して、歌道の革新を唱へたり。享保元文の頃、荷田春滿賀茂眞淵等輩出するに及びて、積年の弊全く打破せられたり。

下河邊長流

下河邊長流(二二八三―二三四五)は、もと大和の人なりしが、中年より大阪の傍に住せり。國學を好み、和歌を能くし、旁ら儒學にも通じたり。人となり强記にして、『萬葉集』『古今集』『伊勢物語』等の如きは、悉く之を暗誦せりといふ。德川光圀其の

名を聞きて招きしかども、權貴に交はるを厭ひて應ぜざりき。光圀即ち紙筆を賜ひて『萬葉集』の註釋を求めしが、業を果さずして歿せり。其の歌集を『晩花集』といふ。

鶯

鶯の　朝いせさせぬ　春にあひて　木の芽も冬の　ねふりさむらむ

花の散るを見て

櫻花　人のうらみを　こきませて　木陰の雪ぞ　いたくつもれる

僧契沖

僧契沖(二三〇〇—二三六一)は、俗姓を下河といひ、父祖は攝津の尼崎候に仕へたり。契沖、幼時髮を剃りて高野山に登り、學行具さに至りて遂に兩部大阿闍梨の僧位を得たり。其の後攝津生玉の曼陀羅院に住せしが、幾もなく去りて諸方に行脚し、年稍高きに及びて大阪の高津に卜居し、庵を結びて圓珠庵といへり。佛書の外、別に國學の蘊奧を究め、中古以後歌道の振はずなれるを嘆き、復古の說を唱導したり。德川光圀の請により、長流の遺業をつぎて『萬葉集』の註釋を力め、遂に『代匠記』を作りて上りき。是に於いて、世人始めて『萬葉』の眞相を窺ふことを得るに至れり。

其の著書

契沖また『古今餘材抄』『和字正濫抄』『勢語臆斷』『源註拾遺』『百人一首改觀抄』『厚顏抄』等の著あり。其の歌集を『漫吟集』といふ。

羇中送日

心ある　人に一夜の　やどかりて　なるゝもかなし　あすの故さと

古寺の花

山寺の　花は殘りて　鐘のねに　今日もくれぬと　人ぞ散りゆく

賀茂眞淵

賀茂眞淵(二三五七—二四二九)は遠江の人なり。三十七才にして京都に上り、春滿に就きて古學を學び、成業の後江戸に出でゝ敎授せり。其の業を受けしものに、本居宣長、村田春海、

其の著書

橘千蔭、加藤宇萬伎、荒木田久老、楫取魚彦等の諸名家ありき。一たび田安中納言宗武に招聘せられしが、間もなく致仕して、GDP心を國學の研究に用ゐたり。其の頃の住居は日本橋濱町にありしが、庭園を上代の田家の風に作りて自ら縣居こ呼べり。和歌の復興こ古學の隆興こは、先進の主唱によれりこ雖も、其の功を成しゝは、主こして眞淵の力なり。眞淵の和歌は能く萬葉の姿情を傳へて、かの天眞雄渾の美を復活せる趣あり。文章の如きも亦能く古體を模して其の妙を得たり。其の古學者こしての著に『萬葉考』『祝詞考』『冠辭考』『源氏物語新釋』『伊勢物語古意』『古今集打聽』等あり。いづれも學識の豊富なるを見るに足る。家集を『賀茂翁家集』こいふ。別に歌學の意見を述べたるものに、『歌意考』『にひ學』の二書あり。

吉野山の花を見てよめる

ことさへぐ　人の國にも　聞え來す　わがみかどにも　たぐひなき
よしの高根の　さくら花　咲きのさかりは　馬なべて　遠くもみさけ
杖つきて　嶺にも登り　見る人の　かたりにすれば　聞く人の　いひ
もつがひて　天雲の　むかぶすきはみ　谷ぐゝの　さわたるかぎり
めでぬ人　こひぬ人しも　なかりけり　しかはあれども　世の中に
さかしらをすと　はこらへる　翁がともは　八百よろづ　よろづの事
ら　きゝしより　見の劣るぞと　いひつらひ　ありなみするを　峯見
れば　八重白雲か　谷見れば　大雪降ると　天地に　心たどろき　世
の中に　言もたえつゝ　行く牛の　遲き翁が　うつゆふの　せかりし
心　悔いも悔いたる

反歌

もろこしの　人に見せばや　みよしのゝ　芳野の山の　山櫻花

花のもとに弓射るかた

さくらばな　花見がてらに　弓射れば　鞆の響に　花ぞ散りける

原月

はりまぢや　夕霧はれて　久方の　月わたりけり　いなみのゝ原

萬葉派の歌人

かくの如く、古體の和歌を尊べるもの、世に之を萬葉派の歌人といふ。契沖の『漫吟集』、長流の『晩花集』、春滿の『春葉集』、宣長の『鈴廼屋集』、春海の『琴後集』、千蔭の『うけらが花』等は、眞淵の家集と共に、此の派を代表するものなり。

他の一派

然るに、萬葉派の歌は往々崇古の弊に流れしが、之を嘆きて、異なる方面より歌道の復古を唱へたるものあり。小澤蘆庵香川景樹等是れなり。

小澤蘆庵

小澤蘆庵(二三八三―二四六一)は尾張の人なり。後、京に移りて歌を冷泉爲村に學び、また自ら古學を研究して、終に一家を成せり。其の歌道を古に回さむとする趣旨は、歌語にあらず、歌體にあらず、其の精神を萬葉風にせむとするにありて、萬葉派の人々の如く、古語を用ゐて古意をあらはさむとするにはあらず。當時、京都には伴蒿蹊、僧慈延、同澄月等世に聞ゆる歌人ありて、蘆庵は是等と共に和歌の四天王と呼ばれたり。

其の著書

著述に『六帖詠藻』、『蘆かび』、『塵ひぢ』等あり。

玉河

鶉鳴く　野路の秋萩　散りすぎて　ひかり隱るゝ　多麻川の水

月夜舟

あごかれて　夜半にや出でし　港舟　からろの音の　月に聞ゆる

橋雨

旅人の　かづく袂に　雨見えて　雲たちわたる　木曾のかけはし

香川景樹

香川景樹(二四三〇―二五〇三)は因幡の人なりしが、京に出でゝ歌人香川黄中の養子となり、德大寺家に仕へて從五位下肥後守に任ぜられぬ。其の歌論は、蘆庵の說を大成したる趣ありて、歌は調にあり、調はすべて優美なるべし、自然の性情を巧まず飾らず、平語のまゝにて述ぶれば、おのづから調

其の著書

も整ひて美しき歌となるべしと云へり。自作の歌には此の理想に合して、調なだらかに姿美しきもの多し。景樹の所說、一時大いに行はれて、其の弟子殆ど全國に洽く、就中熊谷直好、八田知紀、穗井田忠友、渡忠秋は桂園門下の四天王と呼ばれぬ。桂園とは景樹の號なり。其の著『古今集正義』『新學異見』は景樹の語學及び歌學の意見を窺ふべく、『桂園一枝』は其の詠を見るべし其の外『中空日記』『土佐日記創見』等の著あり。

安倍仲麿を明州の海邊に餞したる

夜行けど　月の光し　清ければ　あらはれわたる　唐にしきかな

河上花

大堰川　かへらぬ水に　影見えて　今年も咲ける　山櫻かな

若菜

年々に　若菜といひて　つみしかど　積ればこれも　老の數なり

以上の外の歌人

歌學者

歌集

以上の外、詠歌に巧なるものに、有賀長伯富士谷成章・上田秋成、清水濱臣・橘守部・足代弘訓・千種有功・中島廣足・井上文雄等ありき。歌學の書に、長伯の『和歌八重垣』『和歌麓の塵』成章の『和歌梯』、守部の『長歌撰格』『短歌撰格』等、歌集に成章の『北邊家集』、秋成の『藤簍冊子』、濱臣の『泊洦舍集』、弘訓の『家集』、廣足の『橿園集』、有功の『千々廼舍集』、文雄の『調鶴集』等、名高きものなり。

月　富士谷成章

ゆくへなき　我が心かな　月だにも　山より出でゝ　山にこそ入れ

風　伴蒿蹊

憂き物と　思ひははてじ　よそに咲く　花をも風の　つてにこそ見れ

曉水雞　村田春海

槇の戸を　叩けばやがて　あくる夜の　水雞は人を　はからざりけり

年の暮に　本居宣長

なさばやと　思ひし事の　かずかずも　只あらましに　年ぞ暮れぬる

河春曙　橘千蔭

夜をこめて　みを引きのぼる　舟の帆の　霞に白む　刀禰の河づら

古墳花　　上田秋成

しめはへし　苗代小田に　かげ見えて　年ふる塚の　花も咲きけり

書　　清水濱臣

百千卷　ちまきのふみも　尋ぬれば　我が身一つの　をしへなりけり

早春水　　熊谷直好

山里の　かけひの水の　音すなり　春のひかりや　かよひそむらむ

遠旅　　八田知紀

都いでゝ　遠くこしぢの　旅なれば　かへる山のみ　ながめられつゝ

見花　　足代弘訓

見ても又　見まくぞほしき　山ざくら　なるゝを花は　厭はざるらむ

寄道祝　　千種有功

人も我も　千世の古道　たちかへり　たゞしき跡を　踏まむとぞ思ふ

郭公遍　　中島廣足

風わたる　花橘に　あらそひて　鳴く音を散らす　ほとゝぎすかな

山花似雲　　井上文雄

いつはりの　花は嵐に　晴れにけり　殘れる雲や　さくらなるらむ

狂歌

和歌の外に、又一種狂歌といふものあり。是は題目文辭共に卑俗を避けず、主として滑稽の想を歌ひ又諷刺の意を寓す。古は俳諧歌の名稱の下に、只、歌人の遊戯として行はれたるものあるが、本期に入りては漸く專門の人を出し、享保の頃大阪に由縁齋貞柳起り、次いで其の門人多く出でゝ之を振興せり。既にして、天明年間江戸の市中に流行するや、狂歌は更に規模を擴め、爾後寛政より文化文政に亘りて發達の頂點に達し、此の間に有名なる狂歌師輩出せり。

有名なる狂歌師

朱樂菅江、唐衣橘州、大屋裏住、手柄岡持、四方赤良、鹿都部眞顏、宿屋飯盛、加茂季鷹等即ち是れなり。中に就いて、四方赤良宿屋飯盛最も顯

る。

四方赤良

赤良(二四〇九―二四八三)は、幕府の士太田覃の戯名にして、一に南畝と號し又蜀山人とも呼べり。博學多識にして、諧謔に長じ、其の狂歌は巧を期せずして自ら巧なり。著書に『四方の赤良』等あり。狂歌以外に『一話一言』『南畝莠言』『浮世繪類考』等有益なる著述あり。

宿屋飯盛

飯盛(二四一三―二四九〇)は、江戸の市人石川雅望の戯名にして別に六樹園とも號せり。狂歌を以て法眼の位に叙せられ、宗匠の稱を得しが、兼ねて雅文をも能くし、古學にも通じたり。其の『雅言集覽』は國語學上の一大著述あり。

定家卿月を見る繪に　四方赤良
十五夜にかたふく月の歌よめばあかつきの鐘ごん中納言

八月十五夜　宿屋飯盛
いかでわれ項羽が力もちの夜に月の隱るゝ山を拔かまし

氷室　朱樂菅江
夜のめをも寢ずに守らん氷室もり此の丹誠を水になさじと

春日　唐衣橘洲
かすみては時めく花の王にさへ笠をぬがざる春の夜の月

第三節　俳諧附狂句

俳壇の狀況

室町時代の末に至り、連歌が一轉步をなしたる事は、既に前に述べたるが如し。之を再言すれば、守武宗鑑等が本歌調の連歌の餘りに法則になづめるを厭ひて、俳諧調を主唱し、世の歡迎する所となりたる事なりき。然るに、此の時代に入り、

松永貞德

寬永年間に松永貞德(二二三一―二三一三)出で『淀川』『油糟』『御傘』等の書を著して、宗鑑等の謬妄を辨じ、ひたすら斯道の法式を論ぜしかば、俳壇一時之が爲に風靡せられぬ。貞德派

の俳諧は宗鑑派の如く、滑稽奇智を主とするものにあらず、優美にして雅趣に富みしが、思想は概ね單純なるものありき。俳句も亦然り。世に之を古風といふ。其の高弟に野々口立圃安原貞室北村季吟等ありて各、一方に雄視せり。此の頃より、連俳は漸く第二のものとなり、俳句之に代りて主位を占むるに至れり。

古風

西山宗因
談林風

かくて、寛文の頃、難波に西山宗因(二二六五―二三四二)出で、新に談林風といへる一派を立てき。其の俳想は、貞德派の單純なるに似ず、豊富にして飄逸、特に人生の弱點を穿つに妙を得しかば、一時人々に喜ばれぬ。其の門流の中、井原西鶴田代松意等を逸群とす。然るに、談林の俳風も、久しからずして、狂言綺語を旨とするものとなりしかば、漸く其の弊を厭ひて、他を望むものあるに至れり。此の時に當り、松尾芭蕉卓絕

蕉風

の才を以て一派を開きぬ、是れ即ち蕉風又は正風といふものなり。

芭蕉

芭蕉(二三〇三―二三五四)は、一に桃青とも號せり。伊賀の藤堂家の臣にして、本名を忠左衛門宗房といへり。廿二歳の時、仕を辭して京に赴き、北村季吟の門に入りしが、後數年を經て江戸に下りぬ。其の學老莊に基き、其の人となり淡泊にして喧噪を喜ばず。故に、其の吟、概ね幽玄にして、往々禪味を帶びたり。常に諸國に行脚して悠遊し、元祿七年十月大阪にて歿せり。著書に『貝おほひ』『猿蓑』『續猿蓑』『ひさご』『奥の細道』等あり。其の全集を『芭蕉翁一代集』といふ。

蕉門の十哲

其の門に遊ぶもの數千人、全國到る處門人あらざるなし。就中、榎本其角、服部嵐雪、森川許六、各務支考、越智越人、向井去來、内藤丈草、河合曾良、志田野坡、立花北枝は、世に蕉門の十哲と呼ばる。其の他、岩田

安永以後の俳壇

俳句の集　俳諧書

涼菟、山口素堂、天野桃隣、大淀三千風の如き、また其の名聲俳壇に喧傳せり、是に於いてか、全國の俳風は悉く此の一派に歸しぬ。然れども、蕉風の俳諧も亦幾何ならずして俗化し、閑寂の俳想は難解なること、殆ど謎の如きものとなれり。安永、天明の頃、谷口蕪村、大島蓼太、加舍白雄、加藤曉臺等出でて、俳風の改新を謀り稍、古に復せり。横井也有及び加賀の千代亦其の頃の名家たり。天保の頃、成田蒼虬、櫻井梅室、田川鳳朗、當時の三俳人として特に稱せられぬ。これより後は、俳壇の俗了頓に甚しく、此に詳述する値なきまでに至れり。

俳句を集めたる書は、以上に見えたる外、後人の手に集められて、各人大抵一家の集なきはなし。俳諧を論ぜる書には、岡西惟中の『近來俳諧風躰抄』、去來の『旅寐論』、支考の『俳諧十論』等世に名あるものなり。

皆人の　午睡のたねや　秋の月　　松永貞德
庭にさへ　さぞな落葉は　東山　　野々口立圃
女郎花　たとはゞあはの　内侍かな　　北村季吟
白露や　無分別なる　おきどころ　　西山宗因
鯛は花は　見ぬ里もあり　今日の月　　井原西鶴
雪折れや　昔にかへる　傘の骨　　田代松意
花の雲　鐘は上野か　淺草か　　松尾芭蕉
雲雀より　上にやすらふ　峠かな　　同人
初時雨　猿も小蓑を　ほしげなり　　同人
夏草や　つはものどもが　夢の跡　　同人
稻妻や　きのふは東　けふは西　　榎本其角
埋火や　蒲團をとふす　茶の匂　　森川許六
葉木綿の　雫さびしや　菊の花　　各務支考
何事ぞ　花見る人の　長がたな　　向井去來
日は斜　關屋の鎗に　蜻蛉かな　　谷口蕪村

狂句

橋一つ　出がけに寒し　はつ袷　大島蓼太

瀬をかへて　河音近き　時雨かな　加舍白雄

蚊柱や　棗の花の　散るあたり　加藤曉臺

凩や　たもへば月も　ある夜なり　横井也有

朝顔に　つるべとられて　貰ひ水　千代女

俳句にも、亦俗語を以て、滑稽諷刺の意を謳へる變體のものあり。之を狂句又は川柳といふ。其の作者は多く下流の人にかゝれり。社會の瑕疵、人間の弱點を捉ふるに、着想意外にして、まゝ讀者を絶倒せしむるものありと雖も、猥陋の嫌あるもの少からず。此の物の起原は寶曆頃ありしが、天明年間、柄井川柳といふもの出づるに及びて大に興り、文化天保の間に於いて盛隆を極めたり。句集を柳樽といふ。

おとがひで　額の筆法　はねて讀み

紫震殿　入札に來る　みせ物師

手持なく　辭世をほめて　醫者はたち

第四節　淨瑠璃附脚本

淨瑠璃の起原及び發達

淨瑠璃の起原は、甚だ詳かならねど、室町時代の末に當り『平家物語』、謠曲等に倣ひて作り出したるものなりといふ。然れども、文學として價値あるものゝ出でしは德川時代の事にて、寛文延寶の頃、岡淸兵衛重俊といふもの、膂力怪絶なる勇士の功績を淨瑠璃に編みたるを進歩の緒とす。次いで、貞享元祿の頃、近松門左衛門大阪に出づるに及び、更に大成して全編を五段とし、首尾一貫せるものとせり。其の「材料を史上の事實に採れるを時代物といひ、現時の出來事に採れるを世話物といふ。當時の淨瑠璃は、操人形もて劇を演ずるに當

時代物
世話物

近松門左衛門

り之に合せて語りたるものなり。

近松門左衛門（二三一三―二三八四）は、長門の人にして、本名を杉盛彦四郎信盛といひ、別の號を巣林子とも平安堂ともいへり。若くして僧となり、肥前唐津の近松寺に入りしが、後還俗して京都に出で、一條家に仕へて從六位に叙せられ、既にして職を辭し、更に大阪に移りて、專ら淨瑠璃を作れり。其の著數十編、孰れも靈妙の筆能く人情の微を穿ち、編中の人物一々眞に迫りて恰も活けるものゝ如し。就中、『伊達染手綱』、『鎗權三重帷子』、『夕霧阿波鳴門』、『國姓爺合戰』、『曾我會稽山』等最も名あり。

『鎗權三重帷子』の一節

昨日は今日の初昔、世の口にあふ茶の名所、人は氏より育ちかや。淺香市之進の留守の宿、おさいは流石茶人の妻、物好もよく氣も伊達に、三人の子の親でも、きやしや骨ぼその生れ性、風忍ばしくゆかしくの、卅七とは見えざりし。數寄屋廻りの掃拭ひ、下女中間にもいろはせず、箒はなさぬ奇麗好、路次の飛石敷松葉、石燈籠は苔むして、巖となれる手水鉢、植込の木の下影の、落葉かくなる迄夫婦ながらへて、子供の末を高砂の、松の榮や祈るらん。中息子虎二郎、棹竹よこたへ、年季の角助杖ひつさげ、路次の中に走入り、景清是を見て、物々しやと夕日かげに、打物ひらめかいて、切つてかゝれば塀へさして、刄向いたる强者は、四方へばつとぞ逃げにける。えいやつとう〳〵とぞ打合ひける。ャイ〳〵〳〵よい程にあがけよ。其所なぬくめ。見ごと男の數に入りながら、江戸の供さへ得しをらず、ちひさい子を相手にして、怪我でもさするか。數寄屋の壁に、疵でもついたら何とする。是れ虎二郎、あの馬鹿を相手にして、日がな一日惡あがき、一々に帳につけ、父様お歸りなされたら、きつと告ぐる待つてゐやと、叱られて、いや母様、惡あがきはしませぬ。私は侍じや。鎗遣ひ習ひます。是れなう其方ももう十じや。その合點がいかぬか。侍は侍知れたこと。去りながら父様を見やいの。御前も能く、加增まで下された。武藝は侍の役珍しからぬ。茶の湯を上手になさるゝ故、人の用ひは

近松以後の淨瑠璃作者

んそうもある幼い時から茶杓の持ち樣、茶巾さばきも習うておきや、長々の留守の内、子供がわるう育つたといはれては、母が浮名も恥かしい。男の子は男の手、祖父樣へ往て、大學でも讀習や。馬鹿よ、供して暮方に連れ戻れと、内外までに氣を配る、留守こそ心盡しなれ。お菊は流石姉だけの、母樣いかいお世話、ちとお休みと、さし出す、薄茶々碗の音羽山、大人くれたる振りを見て、チト孝行な。よういやつた、優しうなりやつた。妹のお捨は姥と遊びに出たそうな、行水も仕廻うてか。此の髮は誰れが結つた、万か細工と見へたの、指がまちつと下つた。額もけんで愛想がない。つとの出し樣發つきで、ようも惡うも見せる物。顔の道具相應に、眉が女子の大事の物。前髮もこうでない、母が直して遣りましよと、開く櫛箱鏡臺の、此鏡より世の中は、人こそ人の鏡なれ。

門左衛門の作大いに世の好評を博せしかば、爾來淨瑠璃を作るもの之に倣はざるものなきに至れり。元文、寛保の頃より寶曆、明和へかけて、數多の作者輩出し、著作物も隨つて多かりしが、竹田出雲の『假名手本忠臣藏』、『菅原傳授手習鑑』、『義經千本櫻』、並木千柳の『一谷嫩軍記』、紀海音の『八百屋お七歌祭文』、三好松洛の『御所櫻堀河夜討』、『平假名盛衰記』、近松半二の『奥州安達原』、『伊賀越道中雙六』、『本朝廿四孝』、平賀鳩溪の『神靈矢口渡』等は、趣向複雜、變化の妙に富むを以て特に稱せらる。然れども、之を門左衛門の作に比すれば人物の活動を缺ける嫌あり、

脚本

然るに、此の頃、淨瑠璃の外、また別に狂言作者と唱へて歌舞妓狂言の脚本を作るものありき。脚本とは、演劇の臺詞を始め、舞臺の模樣、俳優の動作、服裝等の注意をも記したるものをいふ。明和安永の交より文化文政に至りて、其の數甚だ多し。櫻井治助の『名譽仁政錄』、『碁盤忠信』、並木五瓶の『五大力』、鶴屋南北の『四谷怪談』等最も名高し。

淨瑠璃脚本の衰微

淨瑠璃の作者は、歌舞伎狂言の榮えて操人形の衰ふると共に、世に出づるもの次第に少く、亦名あるものありしを聞かず。狂言作者には、其の後河竹新七・瀨川如皐等の二三者ありきと雖も、是亦其の脚本に傳ふべき程のものなし。

第三章　散文

第一節　總說

散文界の概況

本期の散文界は殊に富贍にして、殆ど文學のあらゆる種類を含有せり。即ち漢學者は漢語交りの文體を以て儒敎主義を敷衍するあれば、國學者は古體の文章を以て我が古學の旨を發揮するあり。其の他、小說・俳文・狂文等の作家頗りに出で、其の數の多きこと恰も星の如し。是等の人々の作中には、小說以下の外に歷史・傳記・日記・紀行・隨筆・評論・考證の文一も備はらざるなし。

散文の類別

今、是等を主として文體の上より別ち、和漢混和文・雅文・小說・俳文(並に狂文)の四項を立てゝ說くべし。なほ、雅文の條下に於いては、併せて本期文學の一大動力たりし古學回復の來歷を畧叙せむとす。蓋し、雅文の發生並に流行は、國學者が古書の解釋・語法の討究等と關係最も密なるを以てなり。

第二節　和漢混和文

和漢混和文の發達

漢學は德川氏歷代の奬勵を蒙り、我が國未曾有の隆盛を極めたり。然れども、漢文は專門家ならざる者の容易く解すべきにあらねば、文敎を弘布する必要に迫られたる漢學者は、かしこくも一種の國文を創製せり。國語に漢語を混和せる

其の性質

文章即ち是れなり。是は前期に見えたる、戰記隨筆等の文よりも、一層漢文の素を加へたるもの、多少文法上の瑕疵ありと雖も、亦國文の一體に外ならず。自在なる筆勢、雅健なる文體を以て、深遠なる學理を明かにするところ、往々古風なる國文の散漫に失するに優り、更に之を完成したらむには、我が國の普通文たるに最も適すべきものなり。

藤原惺窩

此の期の初に當りて、專ら力を儒學に效ししを藤原惺窩（二二一一―二二七九）とす。其の門に那波活所、松永遐年、林羅山等あり。就中、羅山最も顯る。

林羅山

羅山（二二四三―二三一七）は名を信勝、後に道春といへり。學問該博にして夙に幕府の顧問に備はり、著書百七十餘種、中に所謂和漢混和體の述作あり。惺窩と道春とは共に和歌の作ありき。

本期の初めより中頃までの漢學者其の混和文の著書

松永遐年の門に木下順庵（二二八二―二三五八）あり、順庵の門に雨森芳洲、新井白石、室鳩巣等ありき。別に、熊澤蕃山、伊藤仁齋、其の子東涯、貝原益軒、荻生徂徠、太宰春臺等、また各一派の學者なりき。其の混和文なる著書には、蕃山の『集義和書』『集義外書』『三輪物語』、仁齋の『童子問』、芳洲の『たはれ草』『橘窓茶話』、徂徠の『南留別志』『蘐園談餘』、東涯の『輶軒小錄』『秉燭談』、春臺の『經濟錄』『獨語』等あり。芳洲、鳩巣亦歌作ありき。中に、貝原益軒、新井白石、室鳩巣の三人は、和漢混和文の作者を代表するに足るものなり。

貝原益軒

貝原益軒（二二九〇―二三七四）は、筑前福岡の藩士にして、本名を久兵衛篤信といひ、別に損軒とも號せり。明曆中京都に出でゝ、松永、木下等の門に遊び、後其處に在りて生徒を敎授せしに、從學する者甚だ多かりき。太宰春臺は最も人を許さざる者なりしに、なほ益軒の博學を稱へて、海內無双なりと

評せり。然るに、益軒は高名に驕らず、身を持することゝ益々謙遜、謹愼なりき。著書一百餘種、皆實用を主として、平易、流暢なる和漢混和文を用ゐ、婦女、童幼といへども理解し易からしむ。其の中、『初學訓』、『童子訓』、『大和俗訓』、『養生訓』、『樂訓』、『女大學』、『大和本草』、『諸州廻』等最も世に行はる。

貧富夭壽　『樂訓』

同じく人と生れて、富貴なる人あり、貧賤なる人あり。其高下の品皺に多し、富貴なる人は、おごらずして人を惠むを樂とすべし。乞丐も、生れ付きたる分ありて定まりたる事を悟り、分を安んじて樂しむべし。たとへば、松は高き事數十尺に至り、平地木は低き事數寸に過ぎず、同じく樹木となれど、長短各異なれるは、生れ付き定まればなり。極めて貧しき人も、我分の低きを安じて憂ふべからず、生れ付かざる富貴を羨むべからず。又、世には我れはどもなき人多し。我れより下なる人を見て、我分を樂しむべし、上を羨むべからず。又同じく人と生れたれども、長壽なる人あり、短命なる人あり。長き短き其品多くして、あげて數へがたし。富貴をきはめて萬の事心のまゝなる人も、只命のみ心にかなはず。されども、是れ又生れ付きて天命の定まれる所なれば、短しとて悲しむべき理にあらず。此理に達し天命を樂しんで身を終るべし。死ぬる時もし苦しみ悲しまば、平生樂しめりともかひなかるべし。終りをつゝしむべし。たとへば、松は千年を保ち、槿花は只一日のみ、長短各異なり。是れ生れ付きて定まれる分あれば、短きは長きを羨むべからず、各其分を安んずべし。

新井白石(二三一七―二三八五)、通稱を勘由、解名を君美といへり。幼にして頴悟、長ずるに及びて大志あり、曰はく「大丈夫生きて封侯を得ずんば、死してまさに閻羅王となるべし」と。順庵の門に入りて經史を攷究し、勉强衆に超えたり。德川家宣のなほ甲府にありしに徵されて儒員となり、其の將軍職を拜するに及び、隨ひて幕府に入り、從五位下筑後守となりぬ。其の待遇啻に侍講たるに止まらず、寧ろ內外政務の顧問

さして、献策する所用ゐられざるはなかりき。將軍吉宗統を承くるに及びて職を辭し、著作に從事して殘年を送りたり。」

『藩翰譜』

白石は學問該博にして識見甚だ高し。生涯の著述三百餘種、中に巧妙なる和漢混和文を以て綴れるあり。此の種の書籍中、『藩翰譜』『折焚く柴の記』『讀史餘論』の三書殊にあらはる。『藩翰譜』は甲府の邸に在りし時、君命を奉じて撰びたるもの、慶長五年より延寶八年に至る八十餘年間に於ける列侯三百餘家の傳記を詳述す。其の文遒强にして流暢、蓋し混和文の粹なり。

『折焚く柴の記』『讀史餘論』其の他の著書

『折焚く柴の記』は白石の自傳、混和體の中にやゝ雅文の趣を備へ、亦流暢なり。『讀史餘論』は我が國古今の盛衰を論じたる書、論旨概ね妥當なり。其の他『東雅』『東音譜』『同文通考』は語學上の考案を述べ、『采覽異言』『西洋紀聞』は外來語研究の結果を示し、『古史通』亦歷史に關する好著述なり。

細川藤孝勅命に依りて田邊城を去る（『藩翰譜』）

されども、入道（藤孝）さる古つはものにて、少しも騒ぐ氣色無く、宮津の城を棄てゝ田邊の城に盾籠り、かたき遲しと待居たり。抑、此入道と申すは、弓矢打物とつて堪能なるのみにあらず、さらぬ小藝にだに達せずといふことなく、天下に雙なき多才多能の人なりけり。中にも敷島の道に深くすきて、古今和歌集の秘訣悉く此人に傳はれり。されば、此度我身うち死したらん後、此道永く絶えなんことをかなしみ、城に籠れる初、相傳の書ども取集めて大内へたてまつるとて、

古へも　今もかはらぬ　世の中に　心の種を　のこす言の葉

といふ一首の歌を添へて參らせける。斯くて、丹波、但馬の軍勢雲霞の如く押寄せ、十重廿重に取卷きて、火水になれと攻めけれど、入道ちつともひるまず防ぎ戰ふ。かくては、此城なかなか一時に攻落さるべうも見えず。烏丸の右大辨勅使として大坂に行きむかひ、輝元、三成等に勅諚を傳へらる。夫れ、和歌は我邦の風として、天地ひらけはじまりしより此方百王の今に至るまで、其道長くつたはれり。然るに、今いにしへの事をも歌の心をも知れ

る人忽ちに亡せなんと、最も朝家の歎きなり。いかにもして彼の二位法印が恙なからんやうを謀るべしと宣べられたり。輝元を初として奉行ら謹んで承り、いそぎ早馬を立てゝ寄手の軍をとゞむ。もとより入道は今を最期と思ひ切つて戰ひし程に、寄手たやすう引きて歸らんと叶ふべからず。此よしまた都に聞えしかば、三條西大納言綸命をふくみて、丹後の國に下向ありて、すみやかに勅に應じ、其城を去るべしとありければ、入道畏つて、普天の下、率土の濱、王土、王臣にあらずといふ事なしと承る。ましてや、此微賤の身、かくまのあたり寵渥の辱きをかうむるをや。さりながら、入道が年若き時ならんには、弓矢取る身のならひなり、敢て死を白刄の際に決して、深く恩を黄泉の下に感ずる事もあるべし。今は齡既にかたむきぬ。たとへ此戰に死する事なからんにも、餘命又いくばくぞや。されば、惜しかるまじき身なるが故に、私の名譽をむさぼつて、王命には背きまゐらすべきと答へ奉りて、やがて城を去つて高野山にぞ赴きける。

室鳩巣

室鳩巣(二三一八—二三九四)は通稱を新助、名を直清といへり。又順庵の高弟なり。白石の推擧によりて幕府の儒員となり、八代將軍吉宗の優遇を蒙れり。其の第宅江戸駿河臺に在りしを以て、世人呼びて駿臺先生といへり。其の著『駿臺雜話』、

『駿臺雜話』

『鳩巣小説』最も名高し。『駿臺雜話』は、老後病間にものせし隨筆にて、中に和漢の故事を引用すること多く、文體莊嚴にして而も興味あり。

『鳩巣小説』

『鳩巣小説』は、主に白石との談話等を記したるもの、其の文章略、前に同じ。

其の他の著書

別著『六諭衍義和解』、『五常五倫名義』は、將軍吉宗の命を承けて述作せるもの、一時大いに行はれたり。

老僧が接木（『駿臺雜話』）

忍が岡のあなた、谷中の里に、何がしの院とてひとつの眞言寺あり。翁幼かりし頃、其住僧を知りて、しば〳〵寺に行きつゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人に向ひて、前住の時の事をなん語りしをきゝ侍り

しに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにて、こゝやかしこ御過がてに御覽まし〱けるが、此寺へもおもほへず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧は八旬に及びて、庭に出て、みつわくみつゝ、手つから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、御側に二人、三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、その背き居たりしを、房主なに事するぞと仰られしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく接木するよと御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧が年にて今接木したりとも、其木の大きになるまでの命も知れがたし、それにさやうに心をつくす事ふようなるぞと上意ありしかば、老僧、御身は誰人なれば、かく心なき事を聞ゆるものかな。よくおもふて見給へ。今此木どもつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きになりぬべし。然らば、林もしげり、寺も黑みなんと、我は寺の爲をおもふてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かはといひしをきこしめして、老僧が申すこと實にも理なれと御感ありけり。その程に、御供の人々おひ〱來りつゝ、御紋の御物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大きにおそれて奥へにげ入りしを、御めし出しありて、物など賜りけるとなん。いま、翁も、此老僧が接木する如く、老い朽ちぬれども、ある限りは舊學を究めて、人にも傳へ、書にも殘して、後世に至りて、正學の開くる端にもなり、此道のために萬一の助ともなりなば、翁死しても猶いけるが如し。古人のいはゆる死しても骨朽ちじといひしこそ思ひあたり侍れ。いさゝか我身のために謀るにあらず、諸君も翁がこの心を信じ給へかし。

天明寛政以降の漢學者

前記數書の外、中井甃庵の『こはずかたり』、柳澤淇園の『雲萍雜誌』等亦世に名あり。天明寛政以降は、かの寛政の三學士と稱へられたる、柴野栗山古賀精里尾藤二洲等をはじめ、有名なる漢學者甚だ多かり。殊に、賴山陽は『日本外史』『日本政記』等を著はして、其の名大いに聞えたり。然れども、此等は概ね漢詩、漢文を能くする者にて、和漢混和體の散文に巧なるものは割合に少かりき。只、僅に湯淺常山の『常山紀談』、橘南谿の『東西遊記』、菅茶山の『筆のすさび』、成島司直の『德川實記附錄』、藤田東

湖の『常陸帶』等の數種ありしのみ。此の中『常山紀談』『筆のすさび』『東西遊記』の文最も佳なり。漢學者の著作にはあらざれど、伴蒿蹊の『近世畸人傳』『閑田耕筆』『閑田次筆』、富士谷成章の『北邊隨筆』、山崎美成の『名家畧傳』『提醒紀談』、瀧澤馬琴の『玄同放言』『燕石襍志』等、また此の種の文體なり。此の中、蒿蹊の諸作は、雅文の趣ありて、頗る流麗なり。

藪內紹智が火いけ（『雲萍雜志』）　柳澤淇園

紹智、かつて士明といふ香爐を得て、火いけとなして、朔干法師の訪來られしをりに出せり。朔干師、撫でつさすりつ、香爐をほめられたり。ある時又來りて、その香爐をつく〴〵と見て、申されけるは、かばかりの名器を、何とて火いけにはしたまへるやといへば、紹智笑ひて申されけるは、此器火いけとして遣ひ侍ればこそ、貴僧が目にもつきて、をしまれ侍るなれ、香爐にして床におきたらば、さほどには思ひたまはじものをといひしとぞ。この詞人のうへにも通ひて、いとおもしろし。

後三條院（『閑田耕筆』）　伴蒿蹊

後三條院、藤家の權を奪ひたまひし叡慮、前後比類おはしまさず。宇治の關白は、此帝の御爲に權を奪はれながら、其かくれたまひしを惜み歎きたまひしは、賢王におはしまし〻を思ふべし。宇治殿もまた、世の爲に私のうらみを忘れたまひしは、ありがたきことゝ申すべし。唯うらむらくは、此帝院中の政をはじめたまひて、此御例によりて、白河、鳥羽、後白河も、同じく院中にて政を執らせたまひ、當帝は名のみなりし。されど、崇德院を故なく讓位せさせ奉らせられしが、保元の亂の基とは成りけらし。凡そ女謁行はれ、時の寵臣權を擅にせしなど、其弊藤氏政を執りたまひしに劣ると遠し。是より世の有樣大に變り行きしなり。

雅文家の祖

第三節　雅文及び古書の解釋、語法の研究

歌道改革の目的を以て古文學の研究を首唱したる下河邊長流、僧契冲は、兼ねて散文の復古を計りたる雅文家の祖と

北村季吟
其の著書

なれり。雅文とは、中古の語法文脈を學びて作れるものゝ謂なり。但し、此の二人を初め本期の中頃までに出でたる國學者は、自ら雅文を綴るを旨とせしに非ずして、專ら心を古歌、古文の解釋に委ね、まゝ之を作りしのみ。

長流、契沖の二人、大阪にありて國學の開發に從へると同時に、江戸にありて同じく古文學の註釋に力めし者あり。之を北村季吟とす。季吟(二二八八―二三六五)初は京師に住みて松永貞德の敎を受けしが、後幕府に召されて江戸に移り、和學所の長となりて、再昌院法印に任ぜられぬ。季吟、博覽多識にして、著書五十餘種に及べり。就中、『源氏物語湖月抄』『枕草子春曙抄』『徒然草文段抄』『萬葉拾穗抄』『和漢朗詠集集註』等の註釋書、説明精細にして、後世を裨益する所多し。季吟また詞章に巧ならざるにあらず、殊に俳諧にては一家をなしきと

『大日本史』『扶桑拾葉集』
荷田春滿

雖も、古書の註釋は、蓋し、此の人の名をして不朽ならしむるものなり。其の頃、德川光圀の撰びたる『大日本史』及び『扶桑拾葉集』は、また國文學興隆の機運を助成したるものなり。

さて、我が國文學の復興は、かくの如くにして、其の緒を開きしが、正德享保の頃荷田春滿の出づるに及びて、俄に旭日の勢をあらはすに至れり。春滿(二三二八―二三九六)は京都稻荷山の祠官にして、通稱を羽倉齋宮といへり。人となり謹嚴にして氣節あり。夙に國學の衰頽せるを慨きて、心を古史、古文の研究に潜め、專ら古道の恢復を以て己の任とせり。國史神代の巻と『萬葉集』とに就きては、特に其の創見を見るべし。甥にして嗣子たりし在滿、家學を受けて、亦制度、律令に通ぜしが、別に歌文をも能くしたり。春滿の門に碩學賀茂眞淵出でゝ國文學上に偉勳を立て、眞淵の門より本居宣長、村田春

海、橋千蔭等の英才一時に出でしかば、國學益、天下に普及せり。

本居宣長

本居宣長(二三九〇―二四六一)は、號を鈴の屋といへり。伊勢松阪の人にして、初め醫を業とせしが、二十七歳の時、契冲の著書を見て古學に志し、次いで眞淵の『冠辭考』を讀みて益、奮發し、遂に其の門に入りたり。爾後、心を古典の研究に委ね、國史、國文に就きて前人未發の見を建て、加之、我が儒者が漢土を重んじて自國を輕んずるを憤りて『馭戎慨言』を著し、歌學者流と國學者流との相背馳せるを慨きて『初山踏』を作り、國體を發揮し大道を明かにせむが爲に、『直毘靈』『玉櫛笥』『玉鉾百首』等を述べ、世の學者をして本末向背を知らしめたり。かくて、名聲次第に高く、門人日に月に加はり、業を成す者少からず。男春庭養子大平並に父の遺業を繼ぎて、家聲をおとさざりき。宣長の著書は、前に擧げしものゝ外に數十種あり、古歌、古文の解釋及び評論には『古今集遠鏡』『歷朝詔詞解』『美濃の家裏』『源氏物語玉の小櫛』『萬葉集玉の小琴』等、最も卓說多し。其の隨筆を『玉賀津滿』といひ、歌文の集を『鈴屋集』といふ。

『古事記傳』

宣長の述作する所、かく多方面に亘りし中に、其の最も力を盡したる著述を『古事記傳』四十四卷とす。此は『古事記』の註釋にして、前後三十五年を經て成れるもの、考證の正確なる、能く千古の疑團を解くに足れり。實に我が國有數の大著述にして、史學上は更にも言はず、又文學上及び語學上の至寶たり。

語學上の著書

宣長、別に國語の法則を研究して『詞の玉緒』『紐鏡』を著しき。是れより先、契冲眞淵富士谷成章等、また多少眼を語學の研究に注ぎたりと雖も、我が語法に就きて系統的の著述ありしは、宣長を以て始とす。

宣長の文章

宣長の文章は『鈴屋集』に見えたるものゝ巧なる『玉賀津滿』等に載せたるものゝ淡泊なる、共に雅文の模範とすべし。和歌にも亦誦すべきもの多し。曾て其の肖像に題して「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花」と詠ぜしは、人々の熟知するとなるべし。世人、春滿眞淵宣長を併稱して國學三大人といへれど、宣長の學問、識見は遙に他の二人を凌ぎ、勉强成功の程度亦遙に其の上に出でたり。左に眞淵と宣長との文例を示さむ。

手習ひに物に書きつけたる詞『賀茂翁家集』　賀茂眞淵

いきとしいけるものゝ中に、人ばかり賢き物はあれど、人皆のかしこければ、かたみにかしこ爭ひをする程に、世の中うつろひ變り、心しらひはよこしまにのみなんなりゆくめる。あしたのけに飽きて、夕べのまけをなさす、今日の命ををしみて、あすの死をも思ひ設けぬ鳥けものゝ、中々にいにしへ今とかはる世無きを見れば、かしこめきたる人ぞ、鳥獸には劣れりける。

この心を思ひたらぬ人、あるはかれになづみておのれど苦しみ、あるはこれをうらみて世を捨てなどするよ。生れ來たる世のまに〳〵、よろづの事を思ひのどめば、わへなんものを。

わたくしに記せる史『玉賀津滿』　本居宣長

世におほやけの史にはあらで、私に御代〳〵の事を記せる書、これかれとたはかるを、むかしの皇國人は佛をたふとばぬは一人もなかりしかば、かかる書にさへ、ともすればえうなきほとけざたのまじりて、うるさく、今見るには、かたはらいたきことおほし又さかしら心に、神代にはあやしき事のみ多くして、からめかぬをいとひて、たはくは神武天皇より始めてしるして、神代のほどをばはぶけるは、からくにのむね〳〵しき書に、さるたぐひのあるを、よきことゝ思ひて、ならへる物なり。そも〳〵外國々は、その王のすぢ定まれる事なくして、よゝにかはれば、心にまかせて、いづれのよゝり記さむも難なきを、御國の皇統は、さらに外國の王のたぐひにはましまさず、天照大御神の天津日嗣にまし〳〵て、天地とゝもに、とこしへに傳はらせ給ふを、その本のはじめをはぶきすてゝ、なかからより記してよからめ

村田春海

やよろづをから國にならふも、事によりては、心すべきわざぞかし。

花のさだめ（節略）『玉賀津滿』　本居宣長

花はさくら、櫻は、山櫻の葉のあかくてりてほそきが、まばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず、葉青くして、花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた、山櫻といふ中にも、しな〴〵の有りて、こまかに見れば、一木ごとにいさゝかかはれるところ有りて、また〳〵同じきはなきやうなり。又今の世に、桐がやつ八重一重などいふも、やゝかはりて、いともめでたし。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず、松も何もあをやかにしげりたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、同じ花ともおぼえぬなん。（下略）

村田春海（二四〇六―二四七一）は江戸の商家に生れ、父春道、兄春郷と倶に眞淵の門に學び、終に詞章を以て名を成したり。其の作れる雅文には雄渾なる議論文あり、流麗なる記事

『琴後集』其の外の著書

文あるが、往々漢文の法則を活用せしを以て、抑揚頓挫の妙、大いに一般國學者の作と異なる者あり。よりて、時人、春海を推して、德川時代第一の能文家と稱せり。春海又和歌に巧なり。歌文ともに『琴後集』に收めらる。琴後とは自家の號、別に錦織齋ともいへり。春海固より才學俊秀なりしが、又自尊の氣に富み、往々偏執の癖ありきといふ。著書は、家集の外に、『歌がたり』『時文摘紕』『錦織雜記』等あり。門人清水濱臣亦雅文を能くせり。

清水濱臣が泊洦舍の記『琴後集』

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱の町とぞいひける。こゝにあし原刈りそげてつくりたてたるふせやあり。そはたゞに其池に臨みたれば、名をさゝなみのやとなんいふなる。そも〳〵、霞たなびく春のあしたは、むかつをの梢をうつして花の鏡に向ひ、雁鳴きわたる秋のゆふべは、雲間の影をうかべて月のみ舟をとゞめ、あるははちすの花咲く夏の日、あるは

み雪ふる冬の夜、をりにつけ時にたがひて、見るめのあはれなん盡きざりける。あるじは深くみやび好める人にて、四つの時のあはれを過ぐさず。こをいにしへざまの言の葉にのばへて思ひをやり、又もろこしぶりのしらべにならひて心をしもなぐさめけり。かれたまわへる人々、花にわくがれ、月にたどるも、常にこのふせやをなん問ひ來にける。一日、あるじのいひけらく、世を經て絶えざるものは鳥の跡なり。いで、此屋のたのしみをも、人々とわひむつばへる心をも、ながくうみの子のつぎ〲に傳へて、わが名代とせんとのゆゑよししるしてよとあれば、すなはち筆さしぬらして、いさゝか物のはしに書きつく。寛政といふ年のなゝとせ神無月。

橘千蔭

春海の親友にして、而も文壇上其の好敵手たりし者あり。之を橘千蔭とす。千蔭(二三九八—二四六八)は、又江戸の人にして、姓を加藤、號を芳宜園又朮園(うけらが園)ともいへり。父枝直と倶に亦縣門の高弟なり。性敦厚にして物と競はず、善く偏急なる春海を容れて、終始其の敬愛する所となりき。千蔭最も歌文に長じ、殊に其の雅文は輕妙にして情趣に富み、之を春海の作に比ぶるに、温柔にして逼らざる所、甚だ其の人と爲りに似たり。家集を『うけらが花』といふ。著述の中『萬葉集略解』最も世に行はれたり。千蔭多能にして狂歌狂文をも作り、繪畫又筆書にも巧なりき。

『萬葉集略解』

蟲撰の詞『うけらが花』

秋のあはれは、蟲の音ばかりなるぞなき。いで、武藏野の原にしも聽きてん、家づとにもしなんとて、は月の廿日ばかり、白妙の袖ふりはへ、ぬば玉の駒なめつゝなんゆきゆく。ふぐしもたるをとめに問へば、こゝなん武藏野の原なりといふ。限りも知らぬ淺茅生の上に、たゞ富士のねのみぞいちじるき。かくて見わたせば、夕べの霧はものゝふの小手指原に立ち、入り日の影は赤駒の足柄山にかくろひぬ。やがて野づかさにおり立ちつゝ、つい松ふきたてゝ、さかなまうぼり、くみかはす程に、月はる〲と澄み上れば、置ける露原みな玉をしきなせり。此野らのさまは、人の語れるよりもげに限り

なく、鳴く虫の聲は、都にて聞きつるよりもいと異にて、ますらをと思へる人々らも、え堪へぬ歎きをなんしける。桔梗、かるかや、萩すゝき分けに分けて、をちもこのもゝゐさるまゝに、千々の虫は數々のこにもみちにたり。そもゝゝ、ことせき坪のうちの草むらに聞きて、秋のおもひをやらんよりも、かく大野の心もひろに出でたらんこそ、まことにますらをの遊びなりけれ。かくしつゝ秋てふ秋はとひ來たらんと、野守のをぢにいひて、うちつれて歸りぬ。

むらさきの　根はふかや原　入り亂れ　秋鳴く虫の　聲をきくかな。

春海千蔭等の江戸に鳴るや、上田秋成大阪に出で、亦文章を以て一時に振ひたり。秋成(二三九三―二四七〇)は號を鶉酒舍又餘齋といへり。初め醫と儒とを學び、後加藤宇萬伎に就きて歌文を修め、遂に一家を成したり。其の文を作る、迅速にして法則に拘はらず、興到れば一日輙ち數十章を出すに、頗る莊大にして氣力あり。平生多く人と交ることを好まず、只、

小澤蘆庵伴蒿蹊數輩と親しかりしのみ。著書に『冠辭考續貂』、『伊勢物語古意』等あれど、其の文才の非凡なるを徴すべきものは『雨月物語』及び家集『藤簍冊子』なり。但し、是等は共に語格上の過失多きを欠點とす。

旌孝記(節略)『藤簍冊子』

都六條わたりに、馬場の何某と云ふ人、兄の病してはかなかりしとにつきて、仕ふる君の御いとまたまはり、母一人、兄の子のをさなきをつれて、市に隱れたりしに、親をかしづき、みなし子をいとをしむまめ心を、あたりの人の見聞きて、おはやけのみてとのまゝに、うたへ出でん事を告げしらしゝに、おなかなし。子の親につかふるをほまれとせんと、いとも恥あるとなり。我れはあからさまにこそ物すれ。召されて物問はせ給はんに、何とかは答へ奉るべき。うたへ出でられぬさきにとて、母を負ひ、をさなきが手を引きて、夜にかくれ、いづちへか逃げ去らんとす。家ぬし、隣の人々あわてまどひ、かくたふとき志を奪ふべからずとて、うたへの事止まりぬ。今は昔の御宮

づかへに召しかへされ、家をおこし給へりとや。又、我が難波の故さと人の、母一人を兄弟妹はらから三人がかしづきて、兄は老いゆくまゝに、めとれといへど、いかなる者の出で來て、親につらきとやあらんとて迎へず。弟と妹とは、人の養はんといへど、母のかたはらをさらじとて往かず。母物に詣でんといへば、おとゝひ二人して輿にかきのせ、になひもてゆく。妹はつと添ひてなぐさむ。はた公に聞し召されて、物かづけ、重く賞せさせ給ひしなり。或る人の母之を聞きて、あなたふとし。かゝる寶の子を產みならべし人は、神ほとけの化身にや。たゞいぶかしきは、めとらず養はせず、後いかならんともはかり思はで、其の輿に乘りて出で遊ぶらん親の心こそ知らねと、我れに語られし、これも世のことわりに承り侍りき。(下畧)

寛政前後の國學者

寛政の前後は最も國學全盛の時期なりしかば、詞章、解釋及び語學に名を得たるもの尙ほ少なからず。其の尤を擧ぐれば、楫取魚彥、伴蒿蹊、富士谷成章、其の子御杖、加藤宇萬伎、荒木田久老、尾崎雅嘉、藤井高尙、松平定信(樂翁)等なり。此の人々の

其の著書

著書には、雅文の集に蒿蹊の『閑田文草』、高尙の『松の舍集』、定信の『花月草紙』等あり。語學の書に魚彥の『古言梯』、成章の『挿頭抄』、『脚結抄』、本居春庭の『詞の八衢』等あり。其の他、谷川士淸(二三六七—二四三六)の『和訓栞』は辭書として、塙保己一(二四〇六—二四八一)の『群書類從』は一大叢書として、並に有益のものなり。世稍、下りては、考證家伴信友、類書家高田與淸、神道家平田篤胤、同時に出でゝ三大家の稱あり。

三大家
平田篤胤

殊に篤胤(二四三六—二五〇三)は、當時最も勢力ありし學者にして、熱心に皇道を唱說して儒佛二道を排擊し、其の門下一時頗る多かりしが、後幕府の儒員に陷れられ、著述を禁ぜらるゝに至りぬ。其の著『古史傳』、『古史徵』、『出定笑語』、『西籍慨論』等は世に名高きものなり。歌學者橘守部、語學者僧義門等、亦其の頃の名家たり。是等は皆歌文を能くせざるにあらずと雖も、おの〳〵

『八洲文藻』

別に心を專にする所ありて、其の純文學に於ける貢獻につきては特に記すべき程のものあらず。但し、與清が水戸家の命を承けて編輯せし『八洲文藻』は、光圀の撰なる『扶桑拾葉集』の後をつぎて、古來の名文を採錄したれば、かの『拾葉集』と共に雅文研習者の參考に資すべきものたり。

砧を聞く詞（『泊洦舍集』）　　清水濱臣

近しと聞けば遠し。遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲の、砧をさそふにやあらん。砧の音の、雁がねに通ふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そも〳〵、此音の悲しきか。住むさとのさびしきか。打つをりの憂きゆゑか。皆あらず。聞く人の心のさびしきなり。

山春月といふことを（『松屋文集』）　　藤井高尚

しく物ぞなきと、むかしのなにがしがいたくめでしも、此頃の月ならむと、そゞろに心うかれて、暮るゝよりはし近く居て、ながめつゝ待つに、霞深くたちおほひて、いさゝ暗ういぶせきに、山ぎはのやう〳〵あかくなるは出るなりけり。霞もすこしは晴れて、照りもせず曇りもはてぬながめは、さやかなる秋よりもまさりて、心知れらむ人に見せばやと、この月ばかりにも、言はまほしうなむ。

第四節　小說

假名草子

小說は殆ど此の時代の文學の大半を占めたり。其の發達の端緒を寬文の頃に出でたる假名艸子とす。此は漢籍佛經又は我が古文學等に見えたる珍說異聞を飜案して、娛樂と敎訓とを目的とさせるものにて、鈴木正三の『因果物語』、山岡元隣の『誰が身の上』、『小さかづき』、淺井了意の『御伽婢子』、『浮世物語』等最も名あり。

浮世草子

かくて、天和年間に至り、世態人情を寫すを旨とせる浮世草子といふもの世に行はれぬ。之を假名艸子に比ぶれば遙に

井原西鶴

小説の本領に入れるものなり。其の作者の中、井原西鶴、八文字舍自笑、江島其磧等最も傑出せり。

西鶴(二三〇二―二三五二)は大阪の人なり。西山宗因に學びて俳諧を能くせり。其の著作の文章は筆鋒鋭利にして、能く人生の秘奥を穿つところあれど、寫實の極、文辭猥雜に亘るものあるは惜しむべし。『日本永代藏』、『世間胸算用』、『俗つれ〴〵』等の數種は此の嫌なし。西鶴の風躰を傳へて亦能文の譽を得し者に、西澤一風、錦文流の二人ありしが、其の所長は寧ろ浄瑠璃に在りき。但し、小説の仕組一編に通ずる者は此の二人の作に始まれり。さて、之を大成したるは自笑、其磧なり。

紙子身袋(しんだい)の破れ時（『日本永代藏』）　井原西鶴

商賣ひだり前なる呉服屋忠助とて、むかしは駿河の本町に軒ならべし中にも、花菱の大紋に家名をしらせ、住國はおろかなく、東國北國にあまたの手代出見世をかざらせ、次第に人まし、内の賑ひ、大釜に富士の煙の絶へず、水瓶に湖水を湛へ、朱椀龍田のもみぢを散らし、白箸むさし野に立つ霜柱のごとく、朝の繁昌夕に消ゑて、かくも又なりはつる世のならひ、其時節とはいひながら、亭主の心がけ惡敷が故なり。此人親代にはわづかの身袋(しんだい)なりしが、安部川紙子に縮緬を仕出し、又はさま〴〵の小紋を付け、此所の名物となり諸國に賣りひろめ、はじめは一人なれば三十餘年に千貫目といはれける。其子には利發生れおとりて、忠助家をしつて三十年あまり、勘定なしの無帳無分別、十露盤の玉にもぬけて、春の柳の風に手前亂れて、日當りの氷のごとくむかしの水に歸り、湯を吞むべき薪もなく、かやうにおとろへる事、世にためしすくなし。惣じて、金銀もうくるは成りがたくて、へる事はやし。忠助財寶みなになして、今となつて合點の行く事おそし。是非なく淺間の宮の前なる町はづれに、かりの世のかり屋すまゐもうたてく、人の情も家繁昌の時にて、親類縁者の遠ざかれば、ましてや他人は見ぬ顏も恨みがたし。是程まで主をたほしたる手代共、家名をかへて音信不通に見

捨て、盆のさし鯖、正月の鏡餅も見た事なくて、かなしき月日をおくり、世上はいそがしき師走にも隙にして、兩隣あつまり暮ちかき年せんさく、おの／＼忠助をさして、こなたもわかいやうに見ゑてから、貌にふるめきたる所あり。殊更成人の小共達、大かた中つもりにも違ふまじ。四十八九か。忠助機嫌かはりて、歴々のお目違ひ、私事當年三十九に罷成るといふ。いづれも合點せず、いかにしても三十九四十にしては請取がたし。物はわりやうに語り給へと、皆々問ひつめられ、年は四十七なれども、三十九がまことゝいふ。其仔細を聞けば、元日に雜煮も祝はず、初着物もせず、松かざりは思もよらず、ゑ方が東やら、南に梅が咲くやら、暦さへもたずして、年をとらぬ年が八年有るによつて、四十七ながら三十九じやと、大笑ひして暮しける。

自笑と其磧と

八文字舎風

自笑と其磧とは、共に京都の書肆にして、寶永享保の頃榮えたり。其の著多くは二人の合作にかゝり、西鶴物に模して材を探ること更に廣く、文を行ることます／＼流暢、世に之を八文字舎風と唱へて、一時大に流行せり。其の著書數十部の中『百性盛衰記』『世間子息氣質』『風流東大全』『風流西海硯』等あり。自笑、其磧等の歿後、其の風を繼げるものあらはれしが、概ね先輩を模倣せるのみにて、更に新機軸を出さゞりしかば、世間亦八文字舎物に厭き、京阪の小説壇は、寶暦明和の交に於いて其の終を告ぐるに至れり。

赤本

黄表紙

江戸には、貞享、元祿の頃、赤本と唱ふる草双紙の幼稚なるものの出でしが、皆繪畫を主としたるものにて、一に兒童の翫具たるに過ぎざりき。其の後、やゝ久しうして、天明の頃より所謂黄表紙の流行となりぬ。是れ亦挿畫を主としたる小冊子なれども、寧ろ讀者を大人にとり、滑稽、洒落を極めたり。戀川春町の『金々先生榮花の夢』、明誠堂喜三次（手柄岡持）の『文武二道萬石通じ』、芝全交の『鼻の下長物語』等は、最も當時の嗜好に適したりといふ。然れども、是等は、もとより未だ眞の小説を

讀本

以て目すべからざりしに、寛政の初め、烏亭焉馬、山東京傳、曲亭馬琴等出でゝ、所謂讀本(ヨミホン)を作るに及び、始めて江戸作者の地位を高うせり。就中、京傳は近世小說の祖と稱せらる。こゝに讀本とは、從來繪畫を主としたる小說に對へて云へる名なり。

山東京傳

山東京傳（二四二一―二四七六）は、本名を岩瀨醒といひ、江戸の商賈の子なり。壯年の頃は、放逸にして素行修らざりしが、後專ら戲作に心を委ねたり。著すところの書數十部。就中『本朝醉菩提』『稻妻表紙』『雙蝶記』等最も行はる。又別に『近世奇跡考』及び『骨董集』の著あり。當時の小說家は、大抵洒落本と稱する野卑なる小說を作らざるはなく、京傳も、最初は此の種の著述をものして、一時頗る流行せしが、後には其の非を悟りて再び之を書かざりきとぞ。

洒落本

洒落本は、浮世草子より傳來して一層猥雜なるものなりしかば、寛政三年官より其の發行を嚴禁せり。京傳の門に出でゝ出藍の譽あるを曲亭馬琴とす。

曲亭馬琴

曲亭馬琴（二四二七―二五〇八）、本名は瀧澤解、別に著作堂主人蓑笠漁隱玄同陳人など號せり。江戸の人にして、初め旗下の士に仕へ、尋いで醫を學び、又儒を學びしかども、並に志を得ず、後京傳に賴り、終に小說を以て世に立ちたり。馬琴、壯歲より讀書を好み、和漢の典籍殆ど眼を過ぎざるなく、其の業に從ふや勵精刻苦衆に超え、著すところ二百六十餘種に及べり。之が爲に、晚年明を失ひしかども、尙ほ著作を廢せず、其の子の婦に口授して筆記せしめたりといふ。

其の著書

小說には、『八犬傳』『弓張月』『美少年錄』『胡蝶物語』『南柯夢』『俊寛僧都島物語』、『朝夷巡島記』等最も傑作の聞えあり。別に『玄同放言』『燕石襍志』

勸善懲惡の主義

等の隨筆も亦名高し。

馬琴の小說は從來のとは異なりて、必ず一定の理想を其の中に貫通せしめたり。所謂勸善懲惡の主義是れなり。故に其の仕組も文章も、蕩逸浮靡に涉ることなしと雖も、往々不自然に流るゝ恐れあり。然れども、其の文章の和漢雅俗を折衷して優麗なること、結構の雄大なることは、我が國古今の小說中に其の比を見ざる所なり。而して、馬琴は歷史小說を最も得意とせり。

荒芽山のわびずまひ（『八犬傳』）

不題上野國甘樂郡、荒芽山の麓村に、音音といふ微賤の老女ありけり。年の齡は五十あまり、二三にもなりぬべし。原は武藏のものなりしを、故ありて去歲の夏、この山里に世を避けしより、熟ぬ手技に栲衾、素樸片木の薪樵る、鎌倉遠き不樂僑居。かくて月日をふる鄉の、空なつかしき三芳野の、田面の雁はまだ來ねど、秋としなれば急がるゝ、冬を禦がん洗衣、綴刺とぞ鳴虫に、驚かされて今宵より、夜延の績苧暇なき、現世わたりの苦しきを、今思ひしる浮世の中に、老の杖ぞと頼みてし、兩個の子共はいぬる比、主と供して戰場に、赴きしより死せりとも、生けりともまた信聞ねず。家に遺るは兩個の媳婦のみ。兄が妻を曳手と名づけ、又弟婦を單節と呼べり。年は二十と十八公の、松の操に常葉の竹の、子をし產せて見まほしき、妹伕ながらに玉匣、ふたとせ近く遠離れども、よに隔なき相嫁の、優さず劣らず姑に、朝夕竭す孝行の、德は孤ならで隣へは、いと〳〵遠き山脚の、孤室なれば人しらず、親族もなく友もなく、住得し儘の別世界、言訪ふものは八重葎、檐端にかよふ松風と、絕ぬ筧の音はすれど、女子世帶の水入らず、三人よすれば姦と、訓むてふ文字は我がうへならで、背門の秋蟬鳴暮らしたる、七月六日の甲夜過ぎて、還らぬ人を俟わびしさに、門の戶はまだ鎖さざりけり。有斯て音音は績果てぬ、苧桶を掻遣り、後見かへりて、喃單節きのふよりして管領家の、戶澤山の狩倉に、斯迻の盡處まで夫役を指されし、當日を辛く免れても、憖に困

じたる家に男子の絕えてなければ、可愛や曳手が今朝未明より、馬を追ひつゝ夫に立ちて、出でにし隨に歸りも來ず、途にて荷脫の馬に逢はゞ繼がして早く皈らんと、いひにしものを、いかにぞや、白井まではよも微されじ。趣舍わろくて丁埸まで、替馬に得逢はずとも、暮れて皈らぬ事やはある。居つゝ物を思はんより、田文の茂林の邊まで、出迎ふて將て來てん。留守してたべ、といひかけて、身を起さんとする程に、單節はいそしく推禁めて、物躰なき事宜ふかな。生わかき身の骨を緇みて、天結陰る夜をこめつゝ、親を使ふて、留守やはせん。姉の今迄から遲きは、わらはも心にかゝり侍れど、迎に出でなば阿姑さまの、獨寂しく慰めかねて、おん物おもひを倍さん歟とて、いはで苦しき胸にのみ、案じ煩ひ侍りにき。宵は尙甲夜に侍るなる、彼茂林の邊まで、走一走遄て迎侍らん、霎時の程ぞ俟たせ給へ、と慇に慰めて、立たまくするを、引留めて、おん身を出し遣らんとて、壁訴をやはすべき、二人列拉ちかへり來る、顏見るまではいとゞしく、又物思ひを倍さんのみ。彼玄妙寺の鐘の聲、今撞出すは初更にこそ。早りて出でゝ、邁逅んより、且く俟たばかへり來ん。(下畧)

草双紙
滑稽本

柳亭種彦

『田舍源氏』

式亭三馬
『浮世風呂』
『浮世床』
十返舍一九

京傳及び馬琴の讀本が、大いに世に歡迎せらるゝと同時に、黃表紙より發達せる草双紙及び滑稽本と稱するもの行はれたり。其の作者甚だ多かりし中に、草双紙に柳亭種彦、滑稽本に式亭三馬十返舍一九、最も名ありき。

柳亭種彦(二五〇二歿)は、幕府の士にして、高屋知久といへり。博學にして能文、小說の作九十餘種に及びぬ。其の中、最も世に行はれたるを『諺紫田舍源氏』とす。巧に『源氏物語』を飜案せしものにて、行文頗る流暢、淨瑠璃に八文字舍風を折衷したるが如し。此の外、小說に『正本製』『邯鄲諸國物語』、隨筆に『還魂志料』『用捨箱』等、亦有名なり。

式亭三馬(二四三五―二四八二)は江戶の商賈にして菊池泰輔といへり。滑稽に長じて著書百餘編あり。『浮世風呂』『浮世床』の二編殊に世に稱せらる。十返舍一九(二四二四―二四九

『膝栗毛』

一九は、重田貞一といひて、駿府の小吏の子なり。資性放縱にして吏事を好まず、江戸に出でゝ戯作に從ひたり。其の著述の中、『道中膝栗毛』最も行はる。一九と三馬とは、滑稽小說の作者として、殆ど其の名を同じくせしが、兩者各、得失ありて、一九は寧ろ着想の奇を以て優り、三馬は觀察の精を以て長ぜるが如し。

清水觀音堂の百萬遍　『道中膝栗毛』　十返舍一九

傍の小高き所に机をひかへたる老僧、參詣を見掛けて、「當山觀世の御影は是から出ますぞ。誠に靈驗あらたなる事は、盲がものいひ、あるいて來たゐざりがなはる。一度拜する輩は、いかなる無病達者なりとも、忽ち西方極樂淨土へ救ひとらんとの御誓願じや。どなたも頂いてお歸りなされ。冥加錢を澤山にお心持次第、御信心の方はござりませぬかな。」北八「よくしやべる坊主めだ。時に彌次さん、かの噂に聞いた傘を差して飛ぶといふは、此舞臺からだな。」僧「昔から當寺へ立願の方は、佛に誓うて是から下へ飛ばれるが、怪俄せんのがあり難い處じやわいな。」彌次「爰から飛んだら身躰(カラダ)が微塵になるだろう。」北八「折々は飛ぶ人がありやすかね。」僧「さよじやわいな。たて氣のふれた和郎たちが來て飛びおりるがな。此間も若い女中が飛ばれたわいな。」北八「ハァ飛んでどうしやした。」僧「飛んで落ちたわいな。」北八「落ちて夫れからどうしたね。」僧「ハテ根どひする和郎じや。此女中は罪障が深いさかい、佛の罰で目を廻したわいな。」北八「そして氣が付きやしたか。」僧「氣が付いていんだわいな。」北八「いんでどうしたね。」僧「さて〳〵しつこい人じや。それ聞いて何さんすぞい。」北八「イャわつちが癖として、聞きかけたとは金輪際聞いてしまはねば、氣がすまぬといふものだから。」僧「それなりや云うて聞かそかい。夫れから其女中が全躰其の下地もあつたかして、俄に氣が違うたわいの。」北八「ハテナ氣が違つてどうしたね。」僧「百萬遍を始めたわいの。」北八「百萬遍を始めてどうした。」僧「鉦を叩いて。」北八「鉦を叩いてどうしたね。」僧「南無阿彌だん佛。」北八「それからどうしたね。」僧「南無阿彌だん佛。」北八「コレサ百萬遍のあとはどうしやした。」僧「南無阿彌だん佛。」北八「そのあとはよ。」僧「ハテせわしない。百萬遍じやわいの。マア念佛すましてからのといの。」北八「エ

ゝ其百萬遍すむまで待つて居るのか。途方もねえ。直「イヤこなさん聞きかけたとは、根堀り葉堀り聞かんせにやならんと云うたじやないか。今ちと辛抱して聞かんせいな、窟屈なりやこなさん達も百萬遍手傳うて下んせ。」北八「コリヤ面白かろう。彌次さんお前もこけへ掛けなせえ。サア〳〵南無阿彌だアん佛。」直「逆もの事に鉦入れてやろわいな」とむしやうに鉦を打鳴らして「ハア南まいだいだア。」チャン〳〵。北八「コリアがうてきに面白くなつた。南まいだァ〳〵。」直「わしや用たして來る内、頼みます」と北八に鉦をつきつけ、どこへやら行つてしまう。

人情本　爲永春水

草双紙及び滑稽本の流行は、主として、洒落本の出版を止めたるに依れり。然るに、寛政の禁漸く弛びて、人情日に浮靡に赴くや卑猥なる小說再び時を得たり。世に之を人情本といふ。其の創始者を爲永春水とす。人情本は寫實ある點に於いて一奇なきにあらずと雖も、想詞ともに卑陋にして、動もすれば風紀を紊す恐れあり。是に於いてか、是等の小說は天保十三年官より絶板を命ぜられ、春水は罪に處せられたり。

小說の衰微

前に出でたる人々の外にも、讀本草双紙滑稽本等の作甚だ多く、年々の新刊概ね數十百部に及びたり。然れども、其等は概ね千編一律、愈出でゝ愈拙く、殊に天保以後は書名すら傳ふるに足るものなし。かくて、かの焉馬以下の諸大家が建立せし江戸の小說壇は、末期の德川幕府と共に、漸く瓦解の非運に向ひたり。

第五節　俳文及び狂文

俳文

俳諧の隆盛につれて、元祿の頃より、俳人の間に、一種の小品文行はれたり。其の文簡潔にして幽玄、洒落、恰も俳諧が簡單なる語句の中に深遠の想を蓄ふるに似たり。世に之を俳文といふ。芭蕉、支考、許六をはじめ、俳諧を能くせしもの大方之

横井也有

を作らざるはなかりき。但し、芭蕉の作を除き、一般の俳文は滑稽の分子を含むこと多し。許六の編せる『風俗文選』、支考の編せる『本朝文鑑』は、共に當時の俳文を集めたる書なり。かくて、寶曆の頃に至り、横井也有俳文の名家としてあらはれぬ。

也有(二三六二—二四四三)は尾張の重臣にして、名を孫左衛門といへり。作る所の俳句眞率にして愛すべく、殊に俳文は他人の及びがたき妙味あり。其の著『鶉衣』に載れるもの、概ね輕妙にして、奇想殆ど人意の表に出でたり。也有以後の俳文に至りては、平凡にして言ふに足らず。

妖物論（『鶉衣』）　横井也有

世にばけ物ありて、たほくは女となり、兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、さかやきそりたるはつひに聞かず。夜るばかり出るはいかなるゆゑぞと或人の問ひたるに、誰は例の子供のたかりてわづらはしきにと答へたるぞ、さしわたりての名言なるべき。臆病ものを相手にとればその藝ことに出來榮して、武功の人に出あはすれば思ひの外のあやまちをかうむる。鬼は伯母に化けてかひなをとりかへし、狐は叔父にばけて四民の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんは、その姿をかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また河童はたま〳〵の沙汰なれども、その正躰の穿鑿は、藥屋の見えてたもしろからず。たゞ理窟なきばけ物といふものこそ、ことにゆかしけれ。そも〳〵神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此ばけ物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にものせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小双紙に、はづかしき姿はとゞめられける。さるに、昔今の美婦國色すら、身の終りはくるしく、關寺におちぶれ、檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見たてもうるさきに、たゞこの物の終りばかり、引幕の陰をもたのまず、あとに骸も雜巾もいらず、かきけすやうに失せにけるこそいふばかりなくめでたけれ。

狂文

狂文の作者並に著書

俳文の外、狂歌師、戲作者等の好みて作りたる小品文に、狂文といふものあり。これ亦滑稽を主としたれども、かの俳文と異なるは、題目言辭共に一層卑俗なるにあり。狂文の作者として最も名高きは、風來山人、手柄岡持、蜀山人、宿屋飯盛、北川眞顏、芍藥亭長根等とす。風來は平賀鳩蹊の別號なり。其の狂文の集を『六々部集』といふ。想詞共に野卑を極めたれども、諧謔の中に有力なる諷刺の意を寓せり。岡持、蜀山等の文は、滑稽を主として多く惡意を含まず、殊に蜀山の作には、飄逸の文致殆ど俳文に近づかむとするものもあり。其の文集を『四方のあか』及び『四方の留粕』といふ。岡持の『我おもしろ』、飯盛の『あづまなまり』、長根の『芍藥亭文集』、亦奇什に乏しからず。滑稽小說の作者、一九、三馬等がまた狂文を能くせし事は、其の著書の序文等につきて知るべし。

筆はじめ『四方の留粕』　蜀山人

春は曙、やう〳〵懸取を戻してより、雜煮の餅も咽につまらず祝ひ、銀燭と詩に作れば子細らしけれど、古行燈のしの田づまとも化けさうなるを、はしごの下にかたよせ、やぶれ障子はれ〳〵と掃出すべきを、元日なれば箒もとらず、陳子昂が福如東海とかきし掛物、目ざしのむきみ馬鹿がたけれど、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の付床にさらりとかけ、伊豫簾は却て卷あげたる庭の景色、そゞろごとの浮み出るを、試筆とかいひて、したりがほに書きつけたるも、大つもごもりのくるしさを忘るゝに似て、巨燵辨慶とや笑はれなんとをかし。されば、清女がすさみも、狹衣の發語も、少年の春をめでざるはなく、いつもうれしき正月心に、願はくば二十年あとへ猿辷りのごとすべりかへれと、我のみおもふかも。

刪訂 國文學小史 終

（其の二）

年代	歌		謠	
	和歌・狂歌	俳諧・狂句	淨瑠璃・脚本	和漢混和
江戸時代 後水尾（家康）（家光）	木下長嘯子（二二二九-二三〇八）	杉田望一（二二四六-二三〇三） 松永貞德（二二三一-二三一三）		
二三〇〇 東山（綱吉）	下河邊長流（二二八七-二三四六）「晩花集」 僧契沖（二三〇〇-二三六一）「代匠記」「餘材抄」「漫吟集」	西山宗因（二二六五-二三四二） 松尾芭蕉（二三〇四-二三五四） 榎本其角（二三二一-二三六七）		雨森芳洲（二三二八-二四一五）「たはれぐさ」 貝原益軒（二二九〇-二三七四）「十訓」「諸州め…」
中御門（吉宗）	由縁齋貞柳（二三一四-九四）		近松門左衛門（二三一三-二三八四）「國性爺」「會稽山」「重帷子」	新井白石（二三一七-八五）「藩翰譜」「折…」 室鳩巣（二三一八-九四）「駿臺雜話」 荻生徂徠（二三二六-八八）「蘐園談餘」
	有賀長伯（二三二一-九七）「和歌八重垣」 荷田春滿（二三二九-九六）「春葉集」		竹田出雲（-二四〇七）「假名手本忠臣藏」 紀海音（-二四〇二）「八百屋お七歌祭文」	
二四〇〇 桃園（家治）	賀茂眞淵（二三五七-二四二九）「萬葉考」「冠辭考」「家集」 小澤蘆庵（二三八三-二四六一）「六帖詠藻」	谷口蕪村（二三七六-二四四三） 大島蓼太（二三七八-二四四七）	近松半二（二三八五-二四四三）「奥州安達原」「本朝廿四孝」	太宰春臺（二三四〇-二四〇七）「獨語」 柳澤淇園（二三六四-二四一八）「雲萍雜志」 湯淺常山（二三六八-二四四一）「常山紀談」 橘南谿（-二四六五）「東西遊記」
光格（家齊）	伴蒿蹊（二三九三-二四六六）「閑田詠草」 太田蜀山（二四〇九-八三） 宿屋飯盛（二四一三-九〇）	柄井川柳（-二四五〇）	櫻田治助（二三九四-二四六六）「仁政録」「菲盤忠信」 並木五瓶（二四〇七-二四六八）「五大力」 鶴屋南北（二四一五-八九）「四谷怪談」	伴蒿蹊（二三九三-二四六六）「閑田耕筆」「近…」 菅茶山（二四〇八-八七）「筆のすさび」
仁孝（家慶） 二五〇〇	香川景樹（二四二八-二五〇三）「古今集正義」「桂園一枝」	成田蒼虬（二四二一-二五〇二） 櫻井梅室（二四二九-二五一二） 田川鳳朗（二四二二-二五〇五）		
孝明（家定）（家茂）（慶喜）	千種有功（二四五七-二五一四）「千々廼舍集」 井上文雄（二四六〇-二五三一）「家集」			

散文

和漢混和文

洲(一六六八-一七五五)「たはれぐさ」
益軒(一六三〇-一七一四)「十訓」「諸州めぐり」
白石(一六五七-一七二五)「藩翰譜」「折焼柴の記」
巣(一六五八-一七三四)「駿臺雜話」
徠(一六六六-一七二八)「護園談餘」
臺(一六八〇-一七四七)「獨語」
園(一七〇四-一七五八)「雲萍雜志」
山(一七〇八-一七八一)「常山紀談」
谿(一七五三-一八〇五)「東西遊記」
蹊(一七三三-一八〇六)「閑田耕筆」「近世畸人傳」
山(一七四八-一八二七)「筆のすさび」

雅文・註釋・語學

北村季吟(一六二四-一七〇五)「湖月抄」「春曙抄」「拾穗抄」
荷田春滿(一六六九-一七三六)
賀茂眞淵(一六九七-一七六九)「家集」
富士谷成章(一七三八-一七七九)「かざし抄」「あゆひ抄」
本居宣長(一七三〇-一八〇一)「古事記傳」「直毘靈」「玉勝間」「鈴屋集」
伴蒿蹊(一七三三-一八〇六)「閑田文草」
上田秋成(一七三四-一八〇九)「藤簍冊子」「雨月物語」
村田春海(一七四六-一八一一)「琴後集」
橘　千蔭(一七三五-一八〇八)「うけらが花」「萬葉集略解」
塙保己一(一七四六-一八二一)「群書類從」
清水濱臣(一七七六-一八二四)「泊洦舍文集」
藤井高尚(一七六四-一八四〇)「松屋文集」
伴　信友(一七七三-一八四六)
高田與清(一七八三-一八四七)
平田篤胤(一七七六-一八四三)
僧　義門(一七八六-一八四三)「活語指南」「山口栞」

文

小說

假名草子

井原西鶴(一六四二-一六九三)「武道傳來記」「永代藏」

八文字屋自笑(一六六二-一七四五)
江島屋其磧(一六六七-一七三六)
「百姓盛衰記」「世間子息氣質」

黄表紙

烏亭焉馬(一七四三-一八二二)
山東京傳(一七六一-一八一六)「骨董集」
式亭三馬(一七七六-一八二二)「浮世風呂」「浮世床」
十返舍一九(一七六五-一八三一)「膝栗毛」
曲亭馬琴(一七六七-一八四八)「八犬傳」「弓張月」「美少年錄」
柳亭種彦(一七八三-一八四二)「田舍源氏」
爲永春水(-一八四三)

漢文學者

藤原惺窩(一五六一-一六一九)
林　羅　山(一五八三-一六五七)
木下順庵(一六二一-一六九八)
伊藤仁齋(一六二七-一七〇五)
伊藤東涯(一六七〇-一七三六)
中井竹山(一七三〇-一八〇四)
柴野栗山(一七三六-一八〇七)
尾藤二洲(一七四七-一八一三)
古賀精里(一七五〇-一八一七)
太田錦城(一七六五-一八二五)
賴　山　陽(一七八〇-一八三二)

明治三十三年九月十五日印刷
明治三十三年九月廿五日發行
明治三十四年三月八日訂正再版印刷
明治三十四年三月十五日訂正再版發行

著作權登錄

著者 東京市本郷區駒込西片町十番地 和田萬吉
著者 同 市牛込區矢來町三番地 永井一孝
發行者 大阪市南區心齋橋南一丁目百四十三番地 松村九兵衛
發行兼印刷者 東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地 吉川半七
販賣者 大阪市東區南本町四丁目 森本專助
同 東京市日本橋區通三丁目 林平次郎

86
80

86
80ハ

084882-000-7

８６－８０ハ

国文学小史（刪訂）

和田 万吉
永井 一孝／著

M34

DBB-0056